



日本聖公会

# 北関東教区時報

329号

2018年4月1日(日)

祝  
イースター

## 驚きから喜びに

主教 ゼルバベル 広田 勝一

2018年の復活日の時を、教区の皆さんと共に祝うことができ感謝です。しばらく途絶えていた聖職按手式が3月24日に行われました。福田弘二聖職候補生の執事按手によって公会の執事が誕生しました。また先月には教区では21年ぶりに聖堂聖別式が行われました。3日に小山聖ミカエル教会、26日には東松山聖ルカ教会です。祈りの場として、また宣教の場としてその働きが展開されることを祈ります。

はなかなか理解し難く、信じられない事柄かもしれませぬ。復活の知らせを受けたイエスの弟子たちにとっても同様でした。埋葬されたイエスの遺体に香油を塗ろうと墓にやってきた女性たちは、入口の石がわきへ転がしてあり、墓の中に入ると、そこに白い衣を着た若者が座っているのに「ひどく驚き」ます。その彼女たちに、若者が「驚くこととはない」と語りかけます。それぞれの福音書は、復活の朝の墓での出来事を各々の視点を持って伝えています。その中で、特に復活を「驚き」として、神の力として強調するのがマルコです。そしてこの「驚き」から人間を、さらには世界を変える大きな出来事が始まりました。

「驚きの心は真理に通じる」との小生の言葉と共に、次のようなギリシアの哲人たちの言葉を、かつて紹介したことがあります。「哲学の始まりは驚きの心」「驚きの心こそ、本当の知恵を愛し求める者の心なのだ。愛知(フィロソフィア・哲学)の始まりは、これより他にない」。

日頃、幼稚園の園児とかかわる機会を持っています。園児たちにとっての毎日は、「探求する生活」の連続で、そしてこの「探求」ということの源が、先の「驚き」であると思います。園児たちは、普段私たちが見過ごしてしまうような些細な事象にも目を留め、その不思議さや発見に「驚き」、やがてそのことへの理解を深めるため、探究へと心と意思を向け始めます。園児たちは、小さな哲学者であると言えるかもしれませぬ。驚きを通して、探求する心が芽生え、やがて自由な方法を通して、自然、人間、社会、世界そして真理などに対するまさに「探究」の生活へと向かいます。それが、やがて新たなものを生み出す創造の力

となっていくのです。大人といわれるわたしたちも「小さな哲学者」(子どもたち)に負けない「驚き」の体験をしていきたいものです。そしてこの「驚き」の最たるものが復活の体験ではないでしょうか。主イエスは、ご自分の復活を通して、わたしたちに新しい生命を与えて下さっています。「わたしは道であり、真理であり、命である」と語られる主イエスは、私たちに、驚きを通してながら、生きる力、キリストにあって生きる、真の喜びの歩みへ向かわせて下さいます。私たちは復活日の礼拝を多くの方々と共に迎えています。しかし教区内のいくつかの教会では、僅か数名の皆さんで復活の喜びを分かち合っている教会もあります。そうした教会をいくつか管理してきましたので、事情はわかりませんが、ふと寂しさも感じます。しかしその私たちと共に、天国ではおびただしい数の人々が私たちの礼拝に一緒に加わっている、それを思うと



力が与えられ元気が出ます。復活日、特に天を見上げると、何か天上では大きな喜び、とどろきの様なものが、地上に響いてくるようです。これが復活の朝です。まさに「主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源」(ネヘミヤ8・10)です。復活のイエスは、私たちに「あなたたちは全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」と命じられます。主イエスの復活への「驚き」が、キリストと共に生きる真の「喜び」の人生へと人々を導くことができますよう、祈り求めています。と願います。

# 小山聖ミカエル教会・早蕨幼稚園 礼拝堂聖別式・園舎落成式

司祭 パウロ 矢 萩 栄 司

参加者全員が礼拝堂前で見守る中、教区主教が牧杖で礼拝堂の扉を3度叩き、力強く命じた「門よ、開け」の言葉に、小山聖ミカエル教会礼拝堂の扉が開かれました。

小山聖ミカエル教会礼拝堂聖別式ならびに早蕨幼稚園園舎落成式が、3月3日午前10時から、120名を超える方々が祈りを共にして下さる中行われ、小山における教会・幼稚園の新たな歩みが始まりました。

1934年、マキム主教の命



「門よ、開け」

を受け、当時立教学院諸聖徒

礼拝堂に勤務していた松村栄伝道師によって小山での伝道が再開されました。1943年には、幼稚園が創設され、以

来75年の歳月、戦中戦後、様々な時代の変遷の中を、教会・幼稚園が共に小山での宣教の働きを担ってきました。1963

年、園舎を兼ねた礼拝堂が造られ、4年後の1967年には、幼稚園と分離した教会堂が建築されました。

これまでたくさんのお子たちが、その中で大切に育まれてきた園舎でしたが、面積が幼稚園設置基準を満たしていないことに加え、耐震強度が不足している等、安全安心に保育を続けるには問題があることが明らかになり、建て替えを決断することになりました。

この園舎建て替えに伴い、小山聖ミカエル教会礼拝堂・牧師館を取り壊し、礼拝堂を

同敷地内に場所を移動し新築することが必要になりました。



こちらにも築50年を経過し、老朽化が激しく、また礼拝堂が2階にあるため、高齢の方が出席するのが難しいことが問題となっていました。さらに、

教会が敷地奥に位置しているため、園児の安全のため門が閉じられている時間帯は、教会への自由な出入りが妨げられている状況もありました。

そこで、新たな礼拝堂は平屋とし、さらに保育時間であっても自由に出入りできるように道路に面した場所に建築されました。

新園舎建築にあたり、早蕨

幼稚園は、これまで受け入れて来なかった0〜2歳児も受け入れることができる「幼保連携型認定こども園」として新たなスタートを切ることになりました。社会状況の変化により、子どもたちを取り巻く家庭環境が深刻化しています。幼稚園として実践してきたキリスト教精神に基づく教育保育は、これからも変わらずに継続していかなければなりません。しかし、深刻な家庭環境の中に置かれ、保護者から十分な愛情を受けることができない子どもたちの受け皿に、これまで幼稚園がなっていた事実を見つめ、自らの姿を変えるこ

とが求められています。

保育者が子どもたちを心から慈しみ、家で抱きしめられることのない子をしっかりと抱きしめることができ、平坦ではない人生を生きる力となる「愛された体験」を、どのような家庭に育つ子も持つことができる、そんな園でありたいと思います。それが「子供たちをわたしのところに来てさせなさい」の主イエスの呼びかけに応える、キリスト教の施設としての本来あるべき姿であると思います。

今回、会場の広さに限りがあり、大々的にお招きすることはできませんでしたが、信徒・教役者の方々、また市長はじめ行政関係者、市内各園代表の方々など、大勢の皆様が喜びを共にして下さいました。与えられた恵みの賜物の用いて、教会・幼稚園が、命じられた務めを果たしていく責任の大きさを、感謝のうちにあらためて受けとめています。

(小山聖ミカエル教会管理牧師  
早蕨幼稚園園長)



# 「教会を語る会」

## 開催の経緯

2月12日志木聖母教会を会場に、「教会を語る会」が開催されました。教区主教は、2011年第78回定期教区会主教告示において、「2011年提言」としていくつかの教区宣教課題を挙げ、5年間をひとつの区切りとし、毎年、その課題を振り返りつつ教会を司牧されてきました。そのうちのひとつが発展したものであるとして「信徒・教役者の集い」が毎年開催されています。第1回の集いは、教区の宣教課題について意見を出し合うための「合同部員会」と称して行われ、参加者の分団協議などが行われました。その後、参加者の修養と交わりの時として「信徒・教役者の集い」になっていきました。

日本聖公会は2010年にプレ宣教協議会、2012年に宣教協議会を催し、それ以降の年月を「宣教・牧会の10年」として提言をまとめました。「ていねいな宣教・牧会」をキーワードとして、

2022年に各教区がその成果を持ち寄る宣教協議会を開催することを目標に置きました。

これらのことを踏まえて、教区主教は昨年(2017年)の第84回定期教区会主教告示の中で、「2011年の提言」とその後の各教会、また教区内全体を見直し、今後のことについて話し合う「合同部員・委員会」を開催したい旨を示されました。その教区主教のご発案を受け、教区の現況と今後の歩みを見ながら、発展的に協議する場として合同部長会(常置委員会、三部長の合同会議)にて「教会を語る会」が企画されていきました。

## 宣教・牧会・財政 その「三本柱」について

合同部長会では、教区という「教会」、また各教会の歩みの三本柱は、宣教、牧会、財政であると考えました。以下、それぞれについて合同部長会で分かち合われた想いを紹介いたします。

宣教は、キリストに出会う

人々が増し加わるような働き、また新たな信徒を獲得する目的のみならず、地域社会にある教会の姿、教会が持つメッセージの発信を意味する。教会の「立ち姿」をどのように考えるかという課題です。教会が隆盛した時代から時を経て、その時の良さを残しつつも、急速な社会変化の中で、教会の時代に即したありようが求められている時代です。変えなくてはならないものと、変えてはならないものの判断は非常に難しいです。しかし、私たちが「こうあるべき」というひとつの答えだけでなく、さまざまな可能性を探りつつ、「旅する教会」であり続けようと努めることは、宣教の大きな課題であると言えます。変革を求められる教会、また、これまでと変わらないでいることが求められる教会、様々な教会(あるいは部会・委員会)の視点を持ち寄って、その想いを共有することで新たな気づきを与えられる良い機会となれば

との願いでした。

牧会とは、信徒の少子高齢化、教役者の不足を抱える教会の中で、ひとりひとりがいきいきとキリストの福音に照らされて生きるために必要不可欠なものです。具体的には、長く教会を支えてきた人々が高齢者となり、礼拝や集会に足が運ばなくなる、信徒の家族のみならず教会に子どもや青年の姿が少ない(教会が居場所となっていない)、そういう状況の中で、「教会」があること、祈りの友がいることを実際の生活の中で実感できるように働きが求められています。そしてこれまで、牧会の先導は教役者に委ねられてきた面がありますが、教会の働きとしての牧会は、教役者だけの働きではないこと、これまででも展開されてきた「信徒同士の牧会」を再確認し、これからの実践意識を高めていくことで、牧会のありようがより豊かに認識されていくひとつの機会となればとの思いでした。

財政は、宣教・牧会を教会



のエンジンと見なした時に、そのガソリンとなるものです。豊かであれば何でもできる、乏しかったら何もできないという短絡的なものではないにしろ、財政が安定することで、選択肢や可能性は広がっていきます。教区・各教会の財政は厳しい状況にあります。献金額を増やすことを目的とするだけでなく、色々の整理をし、費目ごとの目的と用途を明確化し、今あるものを安定的に捉えることで、選択肢や可能性を精査することができていくのではないだろうか、そのために、厳しい状況を出し合い、現状を見直していく機会になればとの思いでした。

### 開催の報告

参加者は、教区の各部員・委員、各教会の教区会信徒代表員・教会委員の皆さんでした。志木聖母教会に集った参加者は礼拝堂で朝の礼拝をささげ、その後、教区主教からの講話がありました。

教区主教は「教会を語る会」



想いを語る平岡康弘執事

の開催経緯について触れながら、教区の現状や今後の展望と想いを語られました。継続して開催されている「信徒・教役者の集い」のこと、また現在働いている教役者の現状を紹介しながら、今後、定年までの時間を長く歩んでいく教役者について触れ、若手教役者が語る場を設けられました。そして藤井文宏司祭、平岡康弘執事、斎藤徹司祭がこれからの10年20年について、それぞれの想いと夢を語りました。

昼食をはさんで、午後より、宣教・牧会・財政の3つのテーマについて数名のグループに分かれ、協議の時をもちました。今回は初の開催ということ、協議というよりも何か結論を導き出すような場ではなく、聴き合うことを

大切にして行われました。それぞれの活動、それぞれの地域にあって抱えている課題や今後の展望、率直な想いを語り合い、それを聴き合う時になりました。約2時間のグループ協議でしたが、その時間では足りないと感じるくらい実り多き「聴き合う」時となったようでした。

その後、礼拝堂に集まり全体会として各グループからの報告を受けました。活発にいろいろな意見が出されたとの報告に、豊かな分かち合いの時がもたれた様子がよく分かりました。その報告のまとめが、後日配布される予定です。最後に、日本聖公会組織成



活発なグループ協議



日本聖公会組織成立記念礼拝

立を記念した聖餐式がささげられ散会となりました。礼拝における信施は、教区宣教資金としてささげられました。

想いを語り合い、聴き合った参加者は、またそれぞれの想いをもってお帰りになりました。その想いがこれからの時を確かに築いていく力の源となっていくことを心から祈ります。「教会を語る会」は教区の宣教協議会として今後も継続して開催される予定です。

以下、参加された方の感想をお寄せいただきましたので、ご紹介いたします。

(文書部長

司祭 斎藤 徹)

### 神さまからの宿題

テレジャ 大井 恵子

2月の「北関東教区 教会を語る会」は、日本聖公会の定めた〈宣教・牧会の10年〉の一つの働きとしての会と伺い、少し緊張して参加しました。主題聖句は「いかに美しいことか 山々を行き巡り、良い知らせを伝える者の足は。」(イザヤ書52章7節)でしたが、その聖句を読み返しながら、北関東教区に最初に教会があたえられた頃のことを思い起こす時が与えられました。そこにあつたのは生き生きとした宣教の歴史でした。1878年、川越から米国ミッションの地方伝道が始まり、その後、松山、熊谷、幸手、前橋、日光、宇都宮、高崎、新町、浦和、大宮…と、宣教初期の30数年間に、現在の北関東教区の主な教会が建てられ、同時に女性の宣教師により各伝道地に幼稚園が設立されていきます。それぞれの地を行き巡り「良い知らせ」を

運んでくださったのです。

この会のグループ協議の中で、「僕は青年の頃からずっと教会大好き人間だった」と語られた方がいました。北関東教区に伝道が開始されてから140年、その間に多くの「教会大好き人間」がいらしたことを思います。その方々がイエス・キリストを伝え、教会を守ってくださったのでしょう。

かつてと比べると時代は様変わりし、現代を生きる教会のもつ課題も極めて困難になってきています。でも、どんどん変わってしまう世界の中で、変わらないものを私たちは知らされています。変わらないものに支えられ守られていることを知っています。そのことを伝え続けることが神さまから託された宿題なのでしょう。堂々と「私は教会大好き人間です」と宣言して進み始める時、私たちの傍らにそっと寄り添って支え、進むべき道を示して下さる方の存在が、一層近くに感じられるようになるのかもしれない。

(浦和諸聖徒教会)

## 「教会を語る会」

に参加して

ミカエル 松原 茂樹

2月12日に志木聖母教会を会場に「教会を語る会」が開催されました。

この会は「北関東教区の宣教、牧会、財政」をあらたな一歩のためにくをテーマとして、信徒・聖職59名が集まったの会となりました。

当日は、朝の礼拝に続いて、広田主教からご講話をいただき、引き続き藤井文宏司祭、平岡康弘執事、斎藤徹司祭から教区の将来に向けての思いが語られました。

その後、昼食をはさんで、宣教(2グループ)、牧会(2グループ)、財政の5グループに分かれて話し合いを持ちました。自分が入った宣教のグループでは、「今の教会には広報が足りない。もっと地域に教会を知ってもらうための活動が必要では」といった意見や、「最近教会のホームページを作っているところ

が多いが、内容や言葉の使い方が教会の外の人に向けたものになっていないものが多い」などの意見が挙がりました。また、礼拝の進行がわかりやすいように礼拝式文を工夫するなど、初めて教会に来た人にとっての敷居を下げるためにできることや、その教会に長年勤められていた司祭の思い出を語るユニオンの会を開催して教会から足が遠ざかっている人を招くなど、各教会での事例の分かち合いがありました。

最後に、全体会で各グループの内容を共有し、日本聖公会創立記念日礼拝後に散会となりました。

全体にもう少し時間が欲しいという感じでしたが、どの教会も同じような悩みを持つ中で、それぞれの思いや工夫を分かち合い、次に向けて考え行動していくきっかけとして、第2回、3回と新たな分かち合いができればと感じました。

(水戸聖ステパノ教会)

## 小山祈りの家主催黙想会 Part 2

～ 神のやさしさの中で～

2018年5月16日(水) 午前11時～午後3時半

場 所：小山祈りの家 (小山市東島田2569)

講 師：森 一弘 司教 (カトリック教会)

※参加無料 昼食は各自でご持参下さい。

日々の生活から離れ、新緑の木立に囲まれた小山祈りの家で黙想の時を過ごすことで、心癒され、キリスト者として生きる新しい力が与えられることを願っての企画です。今回は、講師(黙想指導)にカトリック教会の森一弘司教をお迎えいたします。

### 森一弘(もりかずひろ)司教プロフィール

1938年生まれ。1967年ローマで司祭になり、1985年司教に叙階。2000年まで東京教区補佐司教を務める。その間、カトリック中央協議会事務局長を兼務。現在は財団法人真生会館理事長として、講演活動、執筆活動、黙想指導などに携わる。主な著書に、『愛とゆるしと祈りと』『あなたにとって神とは』『キリストの言葉』『人の思いを越えて』『人はみな、オンリーワン』他多数。



# 教区婦人会総会を終えて

フローレンス 鈴木 節子

小雪が舞い、雪のために出禁止が出た教会がある中、2月2日被献日に大宮聖愛教会にて、第70回日本聖公会北関東教区婦人会総会が、8教会31名の参加で開催されました。

10時半より開会礼拝が、司式広田勝一主教、補式チャプレン小野寺達司祭、越智容子

執事で執り行われました。広田主教の説教では、1948年に発足した第1回教区婦人会総会では、おのおの米2合を持参し、1泊2日で開催された事などが語られました。礼拝後は隣のホールにて、

午前部の議事がありました。行事及び役員会報告、教



養部・文書部報告が行われ、昼食となりました。昼食は、

大宮聖愛教会牧師の木村直樹司祭が早朝からご準備くださった愛情たっぷりのカレーと、婦人会の方々が作りくださった野菜サラダをいただきました。(とても美味しいカレーでした)

午後部の開始前に、4月30

日に東松山聖ルカ教会で執り行われる「教区信徒一致の日」合同礼拝について、木村司祭より会場の工事状況、駐車場(80台可)、婦人会バザー会場、使える用具の説明がありました。

その後、決算書および会計収支報告があり、質疑応答もなく終了しました。

時間に少し余裕がありましたので、各教会の代議員に一言お話をいただきました。その後、顧問の広田真知子さんより、「私は週間真知子と言われてまして、ミーハーなこ

とが大好きです。茨城県は魅力度ランキング最下位ですが、最下位だからこそメディアに注目されています。これから最下位でいきましよう」と楽しいお話をいただきました。

最後に、今年度の聖句標語についてチャプレン小野寺司

祭より説明を受けました。「あなたは畏れつつも喜びに輝き おののきつつも心は晴れやかになる」

イザヤ書60章5節 皆様のご協力によりまして、足元が明るいうちに帰路につくことができました。

(日立聖アンデレ教会)



## 春季教区逝去者 記念礼拝

3月17日に小山祈りの家において、春季教区逝去者記念礼拝が行われました。聖ヨハネ修士会小山修道院の跡地が、2002年教区会において、「小山祈りの家」として整備されることになりました。以降、教区の霊的な故郷として、聖職按手式、教役者記念聖餐式(レクイエム)、黙想会、小学生キャンプ、青年の集いなど、祈りや活動の場として幅広く用いられています。

敷地内には教区墓地があり、聖ヨハネ修士会の修士、神愛修女会の修女をはじめ、多くの教役者・信徒が埋葬さ

れています。教区では春と秋に逝去者記念礼拝を行い、信仰の先達の魂の平安をおぼえ祈りをささげています。

11時から教区主教司式・説教にて逝去者記念聖餐式が執り行われ、礼拝堂に集まった約60名が祈りを共にしました。礼拝後には、テーブルを囲みながらそれぞれの時を過ごし散会となりました。

礼拝に先立って、墓所の整備をして祈りをささげる方、埋葬を執り行う方がありました。周りの墓所やお交わりのあった方の墓所の前で祈りをささげるとともに、そこで顔を合わせた方々が旧交を温めるお姿がありました。霊的な故郷を想うひと時となりました。



た。(文書部)

連載

# み言葉の礼拝⑩

## み言葉―旧約聖書

教会問答6に「教会の信仰は何に基づいていますか」「神のみ言葉とみ業に基づいています。それは聖書に示されています」とあります。

神は初めイスラエルの民を全人類の祝福の器として選ばれ、そして遂には受肉されたみ言であるイエス・キリストを歴史の中に送り、その救いの業を完成されました。

教会の信仰の礎である聖書は、この神のみ言葉とみ業の唯一の証言です。聖書の権威は、神のみ言葉とみ業、ことにイエス・キリストに基づいています。現代に生きるわたしたちは、聖書と教会の宣教をとおしてのみ、神のみ言葉とみ業に触れることができるのです。

「み言葉の礼拝」の中心は、この聖書のみ言葉の朗読です。

礼拝での聖書朗読は、教会がユダヤ教の会堂礼拝から引き継いだものです。会

堂礼拝では、律法と預言書が朗読されてきました。

これに対して教会は、メシアがすでに歴史の中にイエスとして現れ、救いを成就したことを信じる共同体でしたから、聖書朗読を神の救いのみ業を想起するものとしたのです。さらに言えば、ヘブライ語で「ことば」は「ダーバル」と言います。そして「出来事」も同じダーバルです。聖書の朗読は、即、神の出来事そのものとして受け容れて、礼拝を守っていたとも言えます。

さて復活節を除いて、第一の朗読は旧約聖書です。旧約聖書はイスラエル民族のために書かれた歴史、預言書、律法、さらには文学など多様な内容を含んだ信仰の書です。

主イエスの時代はまだ旧約聖書は正典化されていませんでした。現在の旧約聖書が正典として確定するのは、エルサレム神殿崩壊後の紀元90年頃のことです。しかし紀元前

2世紀にはヘブライ語からギリシア語に翻訳された七十人

訳聖書が完成しています。これは旧約聖書続編を含んだものです。この聖書が初代教会にとっての聖書でした。

主イエスの神の国の福音の宣教を、旧約聖書の背景を抜きに考えることはできません。またイエスご自身が、旧約聖書の預言者の系譜に立ち、さらにそれを越える神の愛について語っておられます。

初代教会は、主イエスを、旧約聖書のメシア預言との関連の中で理解し、キリストと告白したので、旧約聖書がなければ、教会の信仰告白もないと言ってよいのです。

紀元2世紀に殉教者聖ジャスチンは『第一弁明』で、当時の主日礼拝を紹介して「使徒たちの覚書と預言者たちの著作を読む」と書いています。旧約聖書の朗読は、初代教会の礼拝に連なるものであり、歴史の中で働かれる神のみ業を理解するために欠くことのできないものです。

(司祭 木村 直樹)

### 洗礼おめでとう

1月28日

志木聖母教会

マリア 大西多津子

### 堅信おめでとう

1月28日

志木聖母教会

マリア 大西多津子

2月3日

浦和諸聖徒教会

サラ 黒川 玲子

### とこしえの平和を祈りつつ

2017年12月4日

大宮聖愛教会

ヨセフ 呉 俊雄 (96)

2017年12月27日

大宮聖愛教会

アグネス 古積 光子 (91)

1月5日

大宮聖愛教会

ヨハネ 松田 保男 (69)

2月11日

土浦聖バルナバ教会

ヨハンナ 瀧元 龍子 (89)

### おしらせ

◇本年の「教区信徒一致の日」合同礼拝は、移転・新築された東松山聖ルカ教会、松山聖ルカ幼稚園にて、4月30日に行われます。教会に送られている案内等をご覧いただき、ぜひご参加ください。

◇教区文書部員として新たに菊池晶子さん(川越基督教会信徒)をお迎えしました。



日本聖公会北関東教区時報第329号  
 発行所 日本聖公会  
 北関東教区文書部  
 〒330-0854  
 埼玉県さいたま市  
 大宮区桜木町2-1172  
 電話 048-642-2680

※表紙の写真は、志木聖母教会小礼拝堂です。